令和3年度　美作市立勝田小学校　学校評価書　別紙

（A：目標を上回った　B：ほぼ目標どおり　C：目標を下回った）

学校経営目標等	具体的計画	今年度の達成基準	自己評価 達成状況	評価	総合評価	分析・改善方策	学校関係者評価
1 学力と体力の向上	【基礎・基本の徹底】 ○朝学習・放課後学習等の時間を活用し、漢字の前倒し学習やデータベース問題等を使用した補充学習、視写活動などに取り組み、読む・書く・計算等の基礎・基本を身に付けさせる。	・基礎・基本的な事項の定着率向上を図る。 （目標値：学力定着確認テスト90%） ・「勉強は自分のためになっている」 （児童アンケート目標値：95%以上）	・学力定着確認テスト90% ・「勉強は自分のためになっている」（児童アンケート98%） ・毎日同じプリントやワークでルーティーン化して、児童が取り組みやすいようにした。 ・朝学習や放課後学習では、前年度までの内容も復習していくうちに定着してきている、忘れている内容もあった。漢字の前倒し学習やデータベースの問題を使用することができた。個人差はあるが、勉強は自分のためになっているという肯定的な意見になってきている。 ・学力定着テストでは、子どもたち全体が合格しようと一生懸命取り組むことができた。 ・15分間の有効活用についてはさらに工夫が必要。	B	B	・授業での習熟とふり返りを丁寧にすることで、学習の手応え（新しいことがわかった。こんなことができるようになったという実感）を積み重ねていく。 ・成果は上がっており、取組を継続していく。さらに児童にとってやりやすく、分かりやすい方法を見つけていく。 ・毎日の宿題と朝学習等を関係づけて計画的に行っていく。 ・個人の課題に合わせて、内容や量、取組時間も工夫し、基礎学力の定着度を上げていく。 ・タブレットドリルは、個人の達成状況に応じて取り組めるので、効果的に活用していく。	【総合評価】B 【基礎基本の徹底について】 ・繰り返し学習することが大切で、徐々に取組時間を短くしてスピードアップを図ることが上達への道である。 ・一人ひとりの実態に合わせて、取り組む内容や量を工夫することは大切なことで継続してほしい。 ・少人数のクラスが多いということは、個人の課題を捉えやすいということであり、きめ細やかな支援をしてほしい。 ・1時間1時間のふり返りを効率的に行い、確実な定着を図ることが求められる。 ・読めれば理解することもできるので、漢字の前倒し学習は効果が上がっていると認められる。 【家庭学習の充実】 ・メニューを示したり、自学ノートの作り方を確認したり、児童が自学に困らないように手立てをしたことは、家庭学習を身近に取り組める効果があったと認められる。 ・宿題と学校での授業につながりを持たせるように取り組まれていることで、家庭学習が授業に役立つことが期待できる。 【授業改善】 ・授業改善で、多くの学びや失敗を経験されたことが改善のために役立っていると認められる。 ・若い先生達がベテランの先生に授業のやり方を教えてもらうことでたくさんのことを吸収できている。 ・導入5分を実行することで、時間をマネジメントしていると認められる。 ・児童の関心や意欲をかき立てるような発問を精選し、授業に取り組まれているところに児童に対する真摯な姿が認められる。 ・「授業は楽しく、わかりやすい」（児童アンケート100%）は授業改善効果のあらわれであり、すばらしい。 ・ICTを効果的に活用し、授業を構想できている。 ・クロームブック活用による、思考力、判断力、表現力の向上のため、児童の端末操作に力を入れていることが認められる。 【読書活動の充実】 ・読み取る力を育成するために、読書を推奨していると認められる。 ・読み聞かせを実施することにより、読み取る力が育成されていると認められる。 ・友達同士で面白かった本を紹介し合う場合、ネタバレしてもいいから、読み取った力で紹介し合うことが期待できる。 【運動に親しむ環境作り】 ・一輪車や竹馬にチャレンジすることで、乗れなかったものに乗れるようになった成功体験を通して、児童に自信をつけさせていることが認められる。成功のためには諦めないことの大切さを育んでいる。 ・学校全体で体力向上に取り組むことで、自分自身を守ることができることの大切さを育んでいると認められる。
	【家庭学習の充実】 ○「家庭学習の手引き」や「生活ばっちりカード」による予習・自主学習週間の取組を活用することで、家庭と連携し家庭学習の習慣化を図る。 ○宿題や自主学習の質や量を高められるよう工夫する。	・保護者の理解・協力を促しながら家庭学習の習慣化を図るとともに、記録カード等を用いて実施率を向上させる。 （目標値95%）	・自主学習は、学年によっては任意提出としたが、単元の復習やテストの後の空いた時間に少しずつ取り組むように声かけもした。取り組んだ内容をクラスで紹介し、広まるようにした。また、題材に困ったときのメニューを示したり、授業の中で自学ノートの作り方を確認したりするなど、児童が自学に困らないような手立てをした。 ・記録カード取組期間中は、普段より家庭学習を意識できているが、週末や期間終了後は実施率が下がる傾向があり習慣化については引き続き取組が必要。	B		・自分で内容を決める自主学習については、児童任せにせず、職員で現状の共通理解を図り、充実策を講じる。 ・プリントによる単なる復習ではなく、宿題と学校での授業につながりを持たせ、家庭学習が授業に役立つようにする。 ・家庭学習について、内容や質、直し方や評価方法、児童のモチベーション等について定期的に検証する。（学期末）	
	【授業改善】 ○学習規律を身に付け、主体的・意欲的に学習する児童を育てるため、ICT機器の活用やユニバーサルデザイン教育の視点をもとに、勝田小学校版学習指導のスタンダードによる授業づくりを一層進めながら授業改善を行う。 ○一人1回以上の授業公開や公開授業研究会（年間2回）を実施し、全教員で授業研究を推進する。	・授業交流（授業参観学期に1回以上）の充実。 ビデオによる授業サポートクラブも含む。	・導入を短く簡潔にするとともに、「楽しそう」「やってみたい」と思わせるような提示のしかたを考えることができた。 ・定着問題を時間内に入れられるように時間のマネジメントに気を付けた。 ・授業改善では、多くの学びや失敗を経験した1年だった。校内研修では、どんな力を育てるのか、どんなことができるようになればよいのか、という視点で、自分の今までの教材研究をふりかえることができた。放課後にベテランの先生に教材研究や授業のやり方を教えてもらったことで、たくさんのことが吸収できた。 ・授業の動画保存は、書き戻して細かく授業を分析することができ、参考になった。 ・授業参観交流や授業動画交流は、実施率に個人差があり、計画的に進めることが必要。	B		・空き時間を有効に活用し、個人参観ではなく、学年団参観（1・2、3・4、5・6、支援級）やペア参観（1・4、2・5、3・6、支援級・交流級）のように複数で授業参観を実施して、1つの授業を材料に意見交換できるようにする。 ・導入5分を実行し、定着の練習問題を確実に行うことができるように時間をマネジメントする。 ・児童の関心・意欲をかきたてるような発問を精選するとともに、児童同士の学び合いを取り入れていきたい。	
		・デジタル教科書の活用、ICT活用 ・「授業は楽しく、わかりやすい」の実感度を高める。 （児童アンケート目標値：95%以上）	・「授業は楽しく、わかりやすい」（児童アンケート100%） ・児童のノートや教具を紹介したり、説明したりするときに提示装置を用いて分かりやすいように拡大して見せた。 また、デジタル教科書の本読み機能を使い、児童の興味を引いた。 ・ICTについては、目的なくしようするのではなく、使いどころ（メリット）を見極めながら効果的に活用した授業を構想できた。	B		・提示装置やデジタル教材を活用するとともに、一人一台端末のクロームブックの活用率を上げ、思考力、判断力、表現力（考えの交流と発信）の向上を図る。 ・職員によって端末活用に差が出ないように、活用に向けた校内研修を計画的に行うととに、月に1回は動画によるミニ実践交流を行う。 ・市内市外の他校の取組事例に学ぶ。	
	【読書活動の充実】 ○読み取る力を育成するために、本に親しむ機会を増やす。委員会活動等を工夫するとともに、家庭とも連携して本の好きな児童を育てるような読書活動を推進する。	・各学年の読書目標を立て、朝読書や週末家族読書、長期休業中の親子読書を実施し、読書の習慣形成を図る。 （目標値80%）	・一週間に何度か読み聞かせをし、物語に触れる機会を増やした。 ・本に親しむ機会を増やすために、ちょっとした時間でも児童に、読書を推奨した。 ・朝読書の時間、1週間に1回の本の貸し出し、長期の休みにも読書に親しむように働きかけた。学校全体の中でも熱心に読書活動に取り組む児童がいるので、刺激を受けながら読書習慣づくりにつなげられている。 ・読書量を増やすために、貸し出しを1冊から2冊に変更し、1週間に1回は借りるようにした。また、兄弟学年の担任による読み聞かせを実施した。	A		・子ども達に読んでほしい本を選ばせながら読み聞かせを継続していく。家族読書にも取り組みたい。 ・朝日デジタル新聞のような新聞から社会や自分自身を知るチャンスを作りたい。そのために、調べ学習や記事への意見を書いたりする場面を設定していくことが必要である。 ・自分が興味のある本だけでなく、自分ではあまり手に取らないような本も展示を工夫して紹介していく。また、友達同士で面白かった本を紹介し合う機会もつくっていく。	
	【運動に親しむ環境づくり】 ○運動を好み、進んで運動に取り組む児童を育てるために、個人の記録更新を目標とさせたり、諦めないで最後までやり抜く支援をしたりすることで、心身の健全な発達育成に努める。 ○体育的行事の工夫や器械体操・水泳・陸上・持久走・なわとび運動等へ取り組む期間設定を行うことで、学校全体で体力向上に取り組む。	・児童が楽しんで活動できる雰囲気・場づくりに努め、友達とともに運動や遊びに親しもうとする意欲を高める。	・運動場では、学習の前に遊具を使ったサーキットトレーニングを行ったり、体育館では、準備運動として毎回リズムジャンプに取り組んだ。楽しみながら体力や運動能力の向上に努めた。 ・マット運動や跳び箱など苦手な運動は、段階的に取り組める場づくりを工夫した。 ・チャレンジカードの導入で色々な運動にチャレンジする児童が増えた。また、中庭で一輪車や竹馬にチャレンジする児童が増えた。	B		・サーキット、リズムジャンプの継続。 ・道具や封具を有効活用し、児童が楽しみながら活動できるよう工夫する。 ・体育的な取り組みだけでなく、人間関係も含めた様々な視点からの分析と、それをもとにした取り組みが必要である。	
		・自分の目標を持ち、最後まであきらめずに真剣に取り組むことができる児童を育てる。	・一輪車など継続して取り組まないと出来ない事にも諦めず取り組む児童の姿が増えた。 ・持久走では、学年に応じた目標を設定することで、最後まであきらめずに取り組むことができた。教師側の熱意や声かけ、一緒に取り組む姿勢等も大切である。 ・リレー集会、運動会等、全校で取り組む行事で児童は全力を出し切った。子どものパワーを出し切らせたチーム力が発揮できた。	B		・児童同士でアドバイスしたり、励ましたりできるような環境やグループづくりをしていく。 ・あきらめずにやってよかったと、教師目線ではなく、「子ども目線」で感じられるような授業設計、取り組みの設計をする必要がある。（意識改革）	
2 豊かでたくましい心の育成	【学級集団づくり】 ○思いやりや支え合い、相互理解の大切さを伝えながら、一人一人が居場所のある学級集団づくりを進める。 ○日常的に子ども同士の思いをつなぐ指導・支援を行う。 ○道徳・人権学習の充実を図る。	・「学校に行くのが楽しい」という項目の満足度を上げる。 （児童アンケート、作文、日記や感想等を通して、児童の満足度を探っていく。目標値90%）	「学校に行くのが楽しい」（児童アンケート93%） ・児童同士のよいところ見つけや、毎日の帰りの会でお互いのほめポイント、道徳や学活でのロールプレイングやSSTを行った。 ・ ・学級文集を通じて、子どもたちが今思っていること、何が楽しいか、何に困っているかなどを元に、集団づくりをすることができた。 ・SSEに取り組み、一人ひとりが安心できる集団づくりをしていくことができた。 ・友だちにきつく当たったり感情的になり手が出てしまったりする児童や、思い通りにいかない時に癇癪を起こしてしまう児童などの対応が難しい。 ・経営案の学期ごとのふり返りの時間を取ることにより、別の手立て、次の手立てを講じやすくなった。 児童の様子を共通理解したことで、困っている児童にチームで関わることができた。 ・できていること、頑張ろうとしていることなどプラスの面をお互いに見ていくきっかけをグループワークやアイスブレイクなどで授業の中で取り入れている。	B	B	・SSTの継続。その時に必要なSSTを見極めて取り入れていく。 ・事後対応にならないように、トラブルが起こる前の現象に気づき、早期対応や未然防止を行う。 ・しっかり児童の様子を見取る。 ・全体として、学級づくりとは何なのかということを根本的なところから考える必要がある。	【総合評価】B ・子ども達のがんばりを認め、褒めることが大切で、子ども達のプラスの変容が保護者の信頼にもつながっている。 ・キャリア教育を通して、夢をもつことや将来の自分のめざす姿をイメージすることの大切さを伝えていく必要がある。
	【人間関係力の向上】 ○異学年との交流の中で、人間関係構築力を養うとともに友達関係の幅を広げさせるため、多様な縦割り班活動を計画する。また、リーダー性を養うための時と場所を意図的に設定する。	・縦割り班などの活動内容を工夫することにより、楽しさややりがいの向上を図る。 （児童アンケート、作文、日記や感想等から、児童の思いの実態を掴む。目標値90%）	・縦割り班活動での掃除、縦割り班遊びを自分たちで計画し、実行する経験を通して、異学年交流の機会が増えてきている。 ・縦割り班の中で上級生が下級生の世話をする文化がいい効果を生んでいる様子があった。 ・縦割り遊びや児童会が仲良し集会を計画するなど、昨年度に比べ、縦割り活動は活発に行われているが、実施時期にばらつきがあるため、月に1回の計画的な実施ができると良い。	B		・兄弟学年や縦割り班以外の組み合わせも取り入れ、互いの良さを理解できる場面を増やしていきたい。 ・縦割り班遊びについては、全学年の意見を聞いて内容を決める等、システムそのものから見直していく。 ・縦割り班活動の全体像の見直しが必要になるとともに、そのベースとなるものを学級づくりを通して醸成できるようにしていく。 ・下の学年のお世話をすることで、自分に自信がもてたり、上級生としての自覚が深まったりするので、意図的に計画するとともに、児童に自覚させる事前の投げかけと事後の評価を工夫したい。自己評価、相互評価、他者評価の場面を入れる。	
	【自己有用感・社会性の育成】 ○地域学習等の多様な体験活動や児童会・委員会活動などの活性化により、個々の達成感や自己有用感を高める。 ○地域と協働した教育活動や学校支援ボランティアの招聘を積極的に進め、適切な言葉遣いや正しい礼儀を身に付けるとともに、豊かなコミュニケーション能力を育てる機会とする。	・多様な体験活動や委員会活動などで、児童同士のプラス面の関わりを増やすことで、自己有用感や他の児童のよさを認めようとする心情を育てる。（児童アンケート、作文、日記、感想等から児童の思いを把握していく。） ・「自分にはよいところがある。」 （児童アンケート目標値：90%以上）	「自分にはよいところがある」学校アンケート88% ・スマイルタイムで集会を行い、委員会活動が活発になった。 ・なかよし学級での野菜を育てる活動などは、異学年の児童が話し合いをしたり協力し合ったりして、お互いの良さを学ぶいい活動になっている。 ・自己肯定感が低いので、できたことをふり返る時間を設け、しっかりと認め励ますようにした。 ・児童の良い所を、直接、口頭で伝えたり、連絡帳を介して、児童や保護者にも見える形で伝えたりするなどの取り組みを行った。また、帰りの会の時間を十分に確保できるように努め、児童相互で良い所を見つけられるようにした。	B		・振り返りを大切にし、自分の成長を素直に受け止めることができるように声かけを行う。 ・児童が主体的に新しい取組を考え、全校をまきこんで行う企画などを大切にし、互いに認め合う機会を増やす。	
		・地域の方との交流などを通し、あいさつや礼儀などを身に付けるとともに、コミュニケーション能力を高める。 （児童アンケート目標値：95%以上　ほか）	・運営委員会のあいさつ運動や週目標での日々の取り組みで意識は高まってきているが、コロナ対応もあり、地域の方との交流は十分できなかった。 ・あいさつの声はまだまだ小さいが、あいさつをする子どもは増えている。 ・2学期終業式の朝のあいさつ運動で、元気よく気持ちの良い挨拶ができる児童が多かった。全校の前で、臆さず発言できる雰囲気が少しずつ広がってきた。	B		・まずは、先生が気持ちのよいあいさつを心がける。 ・明るく、楽しく、礼儀正しい雰囲気づくりができるように、校内だけでなく、地域の中にもあいさつ運動を広げていく。 ・地域の方に学校の方針を伝え、取組に協力していただく。 ・感染対策を徹底した上で、地域の方との交流の場面を生み出していく。	
	【生徒指導・教育相談の充実】 ○ふりかえりアンケート等の活用を図るとともに、個々の子どもたちに寄り添い、子どもの変化や思いを受け止めながら、トラブルの未然防止や教育相談の充実を図る。 ○いじめの積極的認知、組織的な早期解消に努める。	・「相談できる」「認めてもらえる」という満足度の向上を図る。 （児童アンケート目標値：90%）	・「相談できる先生がいる」（児童アンケート86%） ・SC.SSW等や地域の専門機関との連携で継続した相談活動が出来ている。 ・アンケートを活用して気になる児童の話を聞くなど、子どものサインを見逃さない工夫ができた。 ・情報共有は大切だが、困り感や問題点ばかりではなく、プラス変容の共有も大切にしたい。	B		・消極的生徒指導と積極的生徒指導を、教師自らが俯瞰して理解し、それを子ども達にフィードバックしていくことで、改善していく。 ・相談したいと感じさせられるように、一つ一つのもめ事に共感ベースで関わり、解決していくことを積み重ねていく必要性がある。 ・アンケートを活用し、気になる児童に声をかけていく。	
3 15年間見通した学び育ちとつくり	【15の春プロジェクトの推進】 ○保幼小中連携の強化を図り、一貫教育を視野に学びと育ちが「つながる」教育活動を積極的に推進する。 ○日常的な情報共有や相互理解の促進を図る。 ○中学校区の特別支援教育推進体制の強化を図る。	・就学前教育をふまえながら、園との連携を深める。 ・小中一貫教育に向けた取組や指導体制づくりを推進する。 ・特別支援教育部会を活性化させ、情報共有及び校園が連携した支援を進める。	・ひまわり園での体験活動、小中での学びの時間（外国語、クリーン作戦、集会）、中学校区の小学校との合同陸上記録会などでつながりを意識した取り組みができている。 ・年に2回、ひまわり園の先生にモニタリングしてもらい、小学校での変容（成長ぶり）を教えていただくとともに、情報交換などを行うことができた。また、年長さんとの交流も行い、いつもは1番下の学年の1年生が、お兄さんお姉さんになり年長さんのお世話をする機会をつくることができた。 ・中学校区での研修は、非常によかった。保育園や中学校にいる先生が子どもたちのよいところや課題になっていることなどを中心に話し合うことができた。 ・様々な取り組みを行っているが、成果の検証が不十分と感じる。成果の検証が行われないまま、例年通りで進めてしまうと成果は上がらない。プロジェクトそもそもの在り方を見直すべきだと感じる。 ・取組が多すぎるので、成果を上げるのであれば焦点化した方がよい。 ・特別支援学級への入級が望ましい児童がいるが、小学校へ来てから検査するのではなく、保育園での検査のおすすめを積極的に行なってほしい。	B	B	・来年度の保小中連携も密に連絡を取りながら、丁寧に計画を立てる。 ・次年度の新1年生だけでなく、ひまわり園の3歳児、4歳児等の就学前に支援が必要な子ども達の確認と、保護者への声かけを発達支援センターや勝田支所と連携して行う。	【総合評価】B ・中学校で2小が合同で学ぶことのメリットは大きく、人間関係ができて中学校に入学できるし、中1ギャップ解消にもつながるのではないか。 ・同じ目標で系統性をもって進んでいくことは大変良いことで、接続カリキュラムも大切にしてほしい。
	【発達段階に応じた力の育成】 ○「学びと育ちの連携表」を指標として、学校と家庭が連携し、各学年の発達段階に応じた力の育成を進める。	・「連携表」に示された各項目において、低・中・高それぞれの段階に応じて育成すべき力を身につけさせる。	・学びの連携表をもとにして、それぞれの発達段階に応じて育った力を確認していく必要がある。チャイム着席チャイム同時に授業スタートについては、だいぶ習慣化してきた。 ・連携表は意識はしたが、組織全体としての取り組みになっているのかは疑問である。内容を園児、児童、生徒の実態に合わせて柔軟にアップデートしていく必要がある。	C		・取組の成果を検証し、連携表を見直すとともに、学期毎に重点的に取り組む項目を決めて組織的に取り組む。 ・インターネットモラルのように家庭の協力が必須の部分は、子どもの実態をしっかり保護者に情報発信し、啓発を図る。	
	【キャリア教育の充実】 ○自己の夢やめあてに向かって、最後まで努力する児童を育てるため、活動ごとに具体的な目標を立てさせ、それに基づいた支援を行っていく。	・現状より少し高めになるような目標・めあてが設定できるように支援するとともに、それに向かって最後まで努力しようとする子どもを育てる。	・一人ひとり描いている夢や思いの強さが違い、成長スピードも違うので、今できていることをしっかりと認め、自信をもって次のステップに進めるように声かけをしている。 ・将来の夢を目に見えるところに掲示しておくことで、子どもたちの意識づけにつながっている。また、友だちの夢も刺激になって、持つ夢に広がりも出てきている。 ・現状に即した現実的な目標・めあてを設定できるようにはなってきたが、現状より少し高めになるような目標・めあてが設定できるという目標自体が現状では非常に困難だと考える。	B		・自分の夢に向かって今何ができるか、考える時間を設ける。 ・子ども達が夢に掲げている職業の方に来校していただき、子どもの頃の夢や現在の仕事について話をしていただく。 ・キャリア教育全体計画進捗状況の確認と成果の検証を行い、目標設定を見直す。 ・自分の夢がまだ定まっていない児童もいるが、色々な選択肢があることを伝えていく。	